の上には、何時の間にか血のやうに赤い色をした月が昇つてゐた。

みんなの間にはこの墓のやうな沈默がかなり長い間續いた。が、その沈默が、

「おや、もうやつて來たやうですよ。」

と云ふ醫者の聲で破られたのはそれから間もなくのことで、もうその時は玄關の方からがやがや云ひ合ふ人聲や、荒々しく床板を踏み鳴らす跫音が聞えて來た。

十

京子が怪我をして線路の傍に投げ出されたやうに倒れてゐるのを最初に見付けたのは郷田だつた。

彼は折角長崎から連れて歸つて來た京子が東京に歸ると間もなく姿を晦ましてしまつたけれども、その後はもう彼女の行方などは探しもしずに、新たに蒙古を舞臺として始めようと思つてゐる事業のために、毎日忙しい日ばかりを送つてゐた。しかしその後でも彼の耳に、時々京子の噂が入ることがあつたが、それはみんな彼女が、今どんなに荒んだ生活をしてゐるかと云ふことを想像させるやうな傷ましい噂ばかりで、いつもさう云ふ噂を聞く度毎に、彼は悲しさうに首を掉つて、

（哀れな犠牲だ。しかしおれには如何することも出來ない。）

と心の中で呟かずにはゐられなかつた。

そのうち發狂して莚車を殺して警察から病院へ送られたと云ふ新聞の記事を見て、彼もまた彼女がさうするのには、自分に責任があつたやうに思はれて心を苦しめてゐたが、一度病院へ見舞に往つた時に斷られてからは、淺猿しい姿を見ない方が好いやうに思ひ返されて、それつきりもう病院を訪ねなかつた。

その夜は彼はやつぱり蒙古で始める事業のことで、日暮里にゐる或る友達のところに往つて、その家を出たのはもう十二時に近い時刻だつた。彼は出された酒を少し飲み過ぎて、陶然とした醉心地になつてゐたので、線路に沿うた近道をぶら〳〵しながら歩いて往つたが、停車場の近くに來ると、不圖線路から少し離れた柵のところに、何だか人の姿らしいものが横はつてゐるのを見付けた。近寄つて見るとそれは京子だつたので、彼はびつくりしてこのことを病院へ知らせようと思つてゐるところへ、丁度捜索に出懸けたものが來合はせて、それからもう殆ど息も絶えさうになつてゐる彼女の體を、停車場の驛長室まで運び込んだ。そして彼は病院に電話を懸けさせたり、近所の醫者に應急手當をさせたりした後で、兎に角擔架を借りて病院まで送つてゆくことにしたのだつた。

玄關の方からもの騷がしいもの音が聞えて來たので、京子を載せた擔架が着いたと云ふことが分ると、これまで應接間で待つてゐた扇之助も、小出も、老人も、醫者も――みんな椅子から立ち上つて、玄關の方へ出懸けて往つたが、彼等はまだ玄關まで往かないうちに、廊下のところで、病院の紋の附いた提燈を先きに、擔架を取り卷いた四五人の人がこつちにやつて來るのに出會つてしまつた。

そこには跫音があるばかりで、誰も口を利くものがなかつた。扇之助は擔架の後から附いて來る鄉田の顏を見て、意外なのに驚いたやうな表情はしたけれども、唯ちよつと目と目とで挨拶をしただけで、別に言葉は交はさなかつた。

京子の擔荷はこれまで入つてゐたところとは別の病室に運び込まれて、彼女の體は徐かに擔荷から寢臺の上に移されたが、この時には、もう彼女は多少意識を恢復して來たと見えて、微かに苦しさうな呻き聲を立て初めた。そして時々は低いながらも叫ぶやうな聲で、

「ああ、怖い……。冷たい手が……冷たい手が……。」

と云つて、閉ぢてゐた目を微かに開けたりした。

みんな往つてしまふと、彼女の病室には鄉田と、扇之助と、小出と、老人と、それから二三人の

醫者と看護婦とだけが殘つた。醫者は胸の傷を調べたり何かして、手當を遣り直してゐたが、その顏には明かに絕望の色が現はれてゐた。

十一

京子はかなり長い間呻き聲を立てゝ苦しんだり、或ひは何かに脅えたやうに微に叫んだりしてゐたが、そのうちさつき醫者が飲ませた催眠劑が利いたと見えて、靜かな寢息を立てゝ睡つてしまつた。

今度京子の入つた病室は、かなり大きな西洋間で、附添の人がゐるために六疊ばかりの疊を敷いた次の間が附いてゐたので、京子が睡つてしまつてからは、みんなその次の間に來て、そこに置いてあつた火鉢を圍んだ。九月の末ではあるが、この四五日まるで冬のやうな寒さで、殊にかう夜が更けてからは、火鉢なしではゐられなかつた。

彼等は次の間の火鉢の傍に來ると、始めて許されたかのやうに、ぼつ〳〵口を利き初めた。汽車に跳ね飛ばされて怪我をしたと云ふことから、もつと酷たらしい姿を想像してゐた扇之助は、案外ひどく衰へたやうにも見えない京子の顏を見ると、何となく自分のこれまで責められてゐた罪が輕

くなつたやうな心持がして、少しは不安も薄らいで來た。で、彼もこつちへ來て火鉢の傍に坐ると、郷田に向つて、

「不思議な御縁で時々變なところでお目に懸かりますなあ。」

と云つて、始めて懐しさうに言葉を懸けた。彼は汽車の食堂車の中で會つた時から、この快活な紳士に對して、何となく好意を感じてゐたのだつた。

「ほんとに不思議と云つても好いでせうなあ。長崎で會つたのもあんな場合だつたし、今度會ふのもこんな場合だし……。いや、僕もあなたには同情してゐますよ。」

郷田も扇之助の役者染みてゐないところに、好意を感じてゐるらしくかう云つたが、その顔にはこれまでに見られないやうな傷ましい色が浮んでゐた。

老人はさつきから一言も口を利かずに、默つてぢつと京子の顔を凝視めて、ぽろ〳〵涙を零してゐたが、みんなが次の間の火鉢のある方へ來てしまつてからも、一人京子の寢臺の傍の椅子に腰を懸けたまゝ、ぢつと彼女の寢息に聽き入つてゐた。彼の顔は全く亡靈と思はれても無理もないほど蒼ざめて、その眼は絶えず悲しさうにしばたゝかれた。

しかし京子がかうして靜かに睡つてゐられたのは、僅か一時間ばかりのことだつた。彼女は突然

何かに魘はれたやうに目を覺ますと、今度はさつきよりも烈しく呻いたり、叫んだりして、一層苦痛が強くなつたやうに見えた。

「ああつ……冷たい手が……冷たい手が……。」

彼女はそんなことを呟くやうに云ふかと思へば、

「扇之助さん……扇之助さん……。」

と狂ほしく扇之助の名を呼び續けるやうなこともあつた。

次の間にゐた人達も、みんな彼女の寢臺の周圍に集まつて來た。醫者は幾度か注射をしたりして、彼女の苦痛を減らすように努めたけれども、精神的にも肉體的にも變調を來してゐるので、いくら手を盡してもその効目は見えなかつた。が、曉近くなるに從つて、彼女の呻き聲はだん〳〵力を失つたやうに低くなつて往つた。そしてそれからは時々吃逆が出るやうになつた。

もう空の端に青白い光が仄かに射し初めて來てからのことだつた。彼女は不圖目を開いたかと思ふと、何かそこいらに見えるやうに四邊を見廻して、

「あゝ……郷田さん……。」

と呟くやうに初戀の人の名を呼んだが、直ぐにまた目を閉ぢたかと思ふと、すやすやと靜かに眠

つてしまつた。

京子が眠るやうに息を引き取つたのは、それから間もなくのことで、窓から射し込んで來る曉の光は、彼女の蠟のやうに白い死顔を、接吻けるやうに照らしてゐた……。

死靈

一

扇之助が都築老人の懺悔話を聽くことが出來たのは、その翌晩濱町の彼の家で京子の通夜をした時のことであつた。彼女は櫻井家からは、長崎から歸ると間もなく離籍されてゐたので、彼はこの哀れな女に對する同情から、その遺骸を病院から直ぐ彼の家に引取ることにして、葬式や何か死後のことは、すべて彼の手で取計らつて遣つた。鄕田は一所不住の放浪兒で、無論家なぞを持つてゐなかつたから、今彼女の遺骸を引き取るところは、彼の家の外になかつたのだつた。

彼女の生涯がかなり華やかだつたにも拘らず、末路が悲慘だつたものだから、通夜に集まつて來るものも、僅に五六人に過ぎなかつた。そこには扇之助と、鄕田と、都築老人と、小出と、緋紗枝

と、それからもう一人翫八が加はつてゐた。彼は莚車が彼女に殺された時、その場に居合はせたと云ふことから、多少の因緣が彼女との間に生じてゐた。

彼女の柩は階下の八疊の座敷に置かれてあつて、そこには線香の匂ひが蕭やかに漂つてゐたが、その匂ひを嗅いでゐると、扇之助には何だかこの間笑談のやうに小出に向つて(坊主になる)と云つた言葉が不圖また寂しく思ひ出された。さう思ふと自分のために死んだとしか思はれない二人の女の魂が、まだ彼の周圍を迷つてゐるやうな氣がして、覺えず祈りたいやうな心持にもなるのだつた。

讀經に來てゐた僧が歸つてしまつて、だん〳〵夜が更けて來ると酒に醉つて聲が高くなるものなぞも出て來て、通夜の席はだん〳〵賑やかになつた。さつきまで、聞えてゐた淸正公の太鼓の音も、急にぱつたり止んでしまつて、四邊がしんとしてゐるだけに、ここでのみんなの話し聲は、妙に甲高に不氣味に聞えた。ここにゐる人達の中で、さつきから默つてゐて、殆ど一言も口を利かないと云つても好い者は、扇之助と例の都築老人との二人だけであつた。後のものはみんな寂しさは、何を紛らすやうに、後から後からいろいろの話題を捉へて來ては話し續けた。その中でも翫八の饒舌、かものを云ふ度毎に、一座のものを笑はせずには措かなかつた。

「ははは、實に君は愉快なことを云ふね。」

さう云つて郷田もその男の諧謔を面白さうに聲を立てて笑ひながら聽いてゐたが、しかし翫八の話も、莚車の殺された晩のことになると、さすがに少し蕭やかな調子になつた。その話が初まつたのはもう十二時に近い時刻だつたが、その時分からばらばら音を立てて降り初めてゐた雨は、その話が進むに伴れて、だんだん激しくなつて往つて、莚車が殺される邊に來ると、丁度その晩のやうに激しい雷鳴を伴つた豪雨となつた。

「戯談ぢやねえ。まるでその晩のやうな雨になりましたぜ。これで幽靈でも出りやあお誂へ向きなんだが……。」

翫八はさう云ひながら戯談のやうに、幽靈のやうな手付をしたが、それが何となく、莚車の死靈でも乘り憑つてゐるやうに思はれて、みんなそつと背後が顧みられるやうな氣がした。

夜が更けるに從つて、雨はだんだん烈しくなつて往つた。そしてそれと同時に通夜の席はだんだん滅入つたやうに言葉少になつて往つて、饒舌だつた翫八ももうすつかり酒に醉つて、こくりこくり居睡りを初めてゐた。と、さつきから殆ど一言も口を利かずに、默つて線香の絶えようとするのを氣にしてばかりゐた都築老人は、何を想つたか不圖扇之助の方を向いて云つた。

「ねえ、扇之助さん。この間は到頭話しそびれつちまつたが……如何です、今夜はひとつわたしの話を、とつくり聽いて遣つては下さるまいか。わたしの懺悔でもあれば、またひとつには今日の佛の回向にもなることなんだから……。わたしはこれまではお前さん一人に懺悔しようと思つてゐたんだが、それでは如何も懺悔が懺悔にならないやうな氣がするから、今夜はもう皆さん前ですつかりお話をしようと思つてゐるのです。」

さう云つて彼は改めてみんなの方に向き直つて、長々しい懺悔話を初めた。

二

「私はこの間もちよつと申上げ懸けたやうに、今は都築と云つてゐますが、これは世を忍ぶ假の名で、實は佐久間卓也と申すものなのでございます。何故私が眞實の名を隱してそんな僞りの名で生きてゐるか。このお疑ひは直ぐにどなたの胸にも起ることゝ存じますが、それは私がこれから申上げる話をお聽き下されば直ぐに分ることで、自分から好き好んでこんな僞りの名前などで生きてゐる譯ではないのでございます。かうやつて別の人間としてでなければ、私はこの世の中に生きて往けなかつたのでございます。

もう大抵皆さんもお察しのことと存じますから、こゝで改めて申上げるほどのこともございませんが、私は今日の佛――あの京子の眞實の父親なのでございます。尤も京子が確か四歳位の時に、私は自分の家を飛出したぎり、ずつと二十何年と云ふものあの子に會ひませんでしたから、京子の方ではおそらくは私をもうこの世の中にゐないものと思つてゐたのに違ひありません。京子の自動車に私が轢かれ損つて怪我をした時が、父子二十何年振りかの對面だつたのですが、私は頭に怪我をして夢中だつたし、京子の方では私の顏をよく覺えてゐないし、到頭それなりになつてしまひました。が、しかし……かへつてその方が好かつたのです。

私は怪我をしてから病院に、それでも一月位は入つてゐましたらう。最初私が昏睡してゐる間には時々京子も來て呉れたさうですが、無論それは父親を見舞に來たのではなく、自分の自動車で怪我をした老人の見舞に來たゞけだつたのです。そして私がやつと氣が付くやうになつてからは、如何してだかまるで見舞にやつて來ませんでしたが、それもその筈です、其時はもう長崎とかへ往つてゐたんだつて云ふぢやありませんか。

しかし私は看護婦の口から、私に怪我をさせたのは櫻人博士の未亡人さんの自動車だと云ふことを聞いた時には、どんなにびつくりしたでせう。私でもさすがに娘のことは氣になりますから、娘

が今どんな身の上になつてゐる位のことは知つてゐましたから、名前を聞いたゞけでも、もう直ぐそれと分つたのです。それにもうひとつ病院にゐる間に私をびつくりさせたことはあの莚車と云ふ男が、ひよつくり私の部屋に入つて來たことです。あの男のことに就ては、後でゆつくり申上げますが……兎に角あの男の顏を見た時には私は、(あゝ、まだ生きてゐるのか)と云ふやうな感じがしずにはゐられませんでした。しかしあの莚車だつて、私が都築七郎だと云ふことは知つてゐても、實は佐久間卓也だと云ふことは知りませんでしたから、私の病室に入つて來た時も、私に向つて平氣で聲が懸けられたのです。私が佐久間卓也だと言ふことが分つたなら、あの男はとても私に向つて一言だつてものを云ふことが出來なかつたらうと思ひます。佐久間卓也と云へばあの男が、一生命懸けで復讐をしようとしてゐた男ですから、そしてその男はもうこの世の中に生きてゐないと信じてゐた男なんですから……。

で冒頭が長くなりましたが、私がこれからお話しようと思つてゐますことは、私の懺悔話と申しますよりは、あの莚車が何故私や私の妻や娘にまで、あんなに執念深く復讐をしなければならなかつたかと申すことで、このことをお話して往けば、自然私がこれまでどんな生涯を送つて來たものだかと云ふことがお分りになるだらうと存じます。」

さう云つて老人はちよつと言葉を途切らして、自分の傷ましい過去を顧みるやうな顔付をした。

三

「それで生立ちから申上げてゐては、あんまり長くなりますが、しかしすつかり省くと云ふ譯にもまゐりませんから、私がどんな家に生れて、どんな風にして育つたかと云ふことをちよつと掻い摘まんで申上げて置きませう。

私はこれでも筑後の柳河の藩中で、かなりな祿を食んでゐた家老格の家に生れたものなのでございます。私の家は代々馬術に秀れてゐたものですから、家中の者からは馬佐久間なぞと云はれて、私も子供の時分から馬に乘ることが好きで、よく習ひに馬場に出かけました。が、私が……さうですなあ、丁度十歳位の時でしたらうか……私の父が何でも女のことの爭ひが原因で、同輩のものを殺して國を立退いてからは、私はもう好きな馬にも乘れなくなつてしまひました。この父が友達を殺したと云ふことが、抑も私の身に暗い影が貪る始めだつたのです。

私の一家はそれからずゐぶん諸國を放浪しました。中國筋から大阪、京都、それから江戸にも出て來ましたが、何しろ世を忍んでゐる身の上ですから、かなり父も母も辛苦をして、馬具の店を出

したり何かしてゐましたが、そのうち維新のあの騷ぎで、萬事そんなものも洋式に革まると云ふやうな譯で、そんな商賣も出來なくなりました。さうかうしてゐるうちに私が丁度十五の時に、父も母も引き續いて流行病のために歿したのです。

しかし父は死ぬ前に、馬術のことから知り合ひになつた長州の或る大官のところへ、私の世話を頼んで置いて呉れたので、私は兩親が死ぬと間もなく、そこの家に引き取られて、書生代りに使はれてゐました。が、兎に角父の頼みもあることなので、學問だけは十分にさせて呉れましたから、私は二十四五の時には飜譯などをして飯が食へるやうになつてゐました。

その時分はもう自由民權論が盛んな時分で、誰でも少し外國語が讀める位の若いものは、みんなさう云つたやうな新しい考へを持つて政治家氣取でゐましたから、私もいつかやつぱりさう云つた仲間に加はつて、演說などをやつて歩くやうになつてゐました。それに私は一方では多少筆が立つたところから、自分でも自由新報と云ふ小さな新聞を出して、ずゐぶん激しく時の政府を攻擊したり何かしましたから、演說のためや論說のために幾度牢屋に打ち込まれたか知れませんでした。が、しかし牢屋に入つたり何かする毎に、私の政治熱——と云ふよりも志士熱と云つたやうなものは、だんだん高まつて來るばかりでした。

そのうち世の中はだんだん變つて往きました。鹿鳴館で舞踏會をやつたり何かした馬鹿な歐化熱の時代が過ぎて、いよ〳〵議會が召集されて、私どもの考へが多少は世に現はれて來るやうな時代が來ました。その時分には私ももうさういつた志士仲間では可なり有名になつてゐましたので、第一回の代議士の選擧には、東京の郡部から無理に候補に立たせられて、そこでは血を流すやうな烈しい競爭をやつて、危いところで當選をして、華々しく第一回の國會に送られました。その時代の私は全く得意の絶頂でした。が、しかしこの得意の絶頂にゐた私の體には、もうそろ〳〵父の蒔いた禍の種子が芽を吹き初めてゐたのです。暗い影が何處からともなく自分の上に射してゐるのを、私は自分でも氣が付かなかつたのです。

それは全く氣が付かなかつたのも無理もないので……私は代議士になる二年ばかり前に妻を貰つて二人の間にはもう一人の女の子さへ設けてゐたんですから……。私は家庭でも幸福の絶頂にゐたんですから……。」

四

「さう云つた幸福の絶頂にゐたと云つても好い時代の私に、誰がそんな暗い影を持つて來たかと申しますと……それがあなた……あたしの最愛の妻——戀女房だつたんだから皮肉ぢやありませんか。

一體私の妻は、東京から十里ばかり離れた或る機業の盛んな町で一二の指に數へられる豪家の娘で、この年になつて自分の口から申しますのもをかしなものですが……まあ、あたしの辯舌に惚れて嫁に來たと云つても好い位だつたのでございます。何しろ妻の父が大の自由黨員の政治狂で、私を無理に代議士の候補に立てたのも、みんなこの男の尻押だつたので、私が當選した時なぞは涙を零して喜んで呉れました。

さて、私が代議士に當選してから間もなくのことです。もうその時分には夫婦の間に一人の女の子も出來てゐたし、至極平和に暮らしてゐたのですが、或る日妻が里に往つてゐる留守に、私は不圖したことから妻の祕密を發見してしまつたのです。と云ふのは外でもありません、私が何か探しものがあつて、妻の用簞笥の抽斗を開けたりしてゐるうちに、私はそこに一束になつて妻が私のところに嫁付いて來る前に、或る男と往復したらしい手紙が收つてあるのを見付けたのです。

私が何の氣なしにそれを取り上げて、中を讀んで見た時の驚きはどんなでしたらう。私は息が窒るやうな心持で、一通一通一字一句も讀み洩らさないで、悉くその手紙を讀んでしまひました。秋

もうかなり寒くなつてからでしたが、手紙をすつかり讀み終つた時には、私の體はまるで熱でもあるやうに熱くなつてゐました。そして私は讀み終つた後で、

（ああ、讀まなければ好かつた。）

と思はず歎息を吐くやうに呟いたのです。

全く私はこの手紙を讀んだために、それからどんなに苦しまなければならなかつたでせう。私が妻が里から歸つて來ても、口を利くことさへも出來ない位でした。怒りと云はうか、悲しみと云はうか、何とも云へない重苦しい心持で、私は二三日過してしまひましたが、到頭もう默つてゐるのには堪へられなくなつて、私は妻を自分の部屋に呼んで、手紙を讀んだと云ふことを話してしまつたのです。

妻は最初はびつくりしたやうでしたが、直ぐにもう心を極めたものと見えて、涙を零しながら、その秘密をすつかり私に打ち明けて話した上で、如何でも存分にして呉れと云つて、身を投げ出して自分の罪を詫びたのです。妻からその時聽いた秘密と云ふのは、全く私には意外とも何とも云ひやうのないやうな話でした。第一相手の男が役者だと云ふことからして、その時分の私には汚らはしいものに思はれてなりませんでした。

妻の話に依ると——その役者は莚之助と云ふ田舍廻りの旅役者で、或る時そこの芝居小屋に懸つたのを、親類の娘と一緒に見物に行つて、その娘に誘はれて樂屋に行つたのが、そんなことになる初めだつたと云ひます。何しろ妻の父は政治狂と云ふやうな男で、まるで家のことなぞは關はないし、母は藝者上りと來てゐるのですから、こんなことになるのも無理もなかつたのですが……しかしそれは私に取つて全く致命的な打擊でした。私は全く幸福の絶頂から突き落されたやうな氣がしました。

私はいつそ離緣にしようかと思ひましたが、功名心の盛んだつた私には、妻の父と云ふ大きな後援がなくなると云ふことが、自分の政治的の地盤を失ふやうに思はれて、思ひ切つてそんなことをすることさへも躊躇はれました。それに結婚後の出來事と云ふ譯ではなし、京子と云ふ可愛い女の子もあることですから、私には思ひ切つてそんなことをすることも出來なかつたのです。

それで結局（罪を許す）と云ふことを一言云つて、妻の秘密はそのまま二人の胸から葬つてしまはうと思つたのですが……しかし世の中のことは中々さううまくは往きませんでした。私はかへつてその秘密のために世の中から葬られることになつてしまつたのです。」

五

「この秘密の世界に住んでゐた悪魔が、現實の世界に乗り出して來たのは、それから間もなくのことなのでした。

或る時――さうです、そんなことがあつた翌年の正月、同國人ばかりの新年宴會が開かれたその席上での話だつたと思ひます。私は不圖そこにゐた人達が、私が聽いてゐるとも知らずに、私の父の噂をしてゐるのが耳に入りました。

『佐久間の親爺が殺した青柳と云ふものゝ息子が、役者になつてゐるさうぢやないか。』

『ふうん、そりやあ何て云ふ役者だらう。』

『何でも莚之助とか云ふのだが……。まだそれほど好い役者ではないのぢやさうだ。』

父の噂から引き續いてこんな言葉が取り交されるのを聽いてゐるうちに、不圖莚之助と云ふ名前を耳にした私は――それが父に殺されたものゝ子であると云ふことを知つた私は、事實刀で一太刀浴びせ懸けられたやうに冷りとしました。で、私はもうその席に居堪まらずに、直ぐに歸つてしまつたのですが、さて、さうなると歸る途々も、この皮肉な『復讐』が如何にも自然に行はれてゐるのに、胸を戰かせずにはゐられませんでした。が、しかし『復讐』はまだこれだけではありませんでした。莚之助――莚車と改名したのは、それからずつと後のことです――のほんとの復讐はこの時分から始まつて、到頭あの男が私の娘の京子に殺されるまで、殆ど一生と云つても好い位の長い間續いたのです。因果と云つてしまへばそれまでゞすが、私には何だかそんな短い言葉では云ひ現はせないやうな不思議な心持が感じられてならないのです。

この悪魔が最初の復讐の相手に選んだのは、やつぱり自分に背いて他所に嫁付いて往つた私の妻よりも彼の手からその戀人を奪つた私なのでした。私はそれから殆ど毎日のやうに知らない人から謎のやうなことを書いた手紙が來るのに脅かされなければならなかつたのです。その手紙には私の妻がまだ莚之助と會つてゐると書いてるものや、京子はお前の子ではなく莚之助の子だと書いたものや、皆な私達の胸にだけ隠して置いて永久に葬らうと思つてゐる秘密に關はらないものはない位だつたのです。そしてその手紙はいろいろ差出人の名は違つてゐますがみんな同じ人から寄越す呪詛の手紙だと云ふことは、少し注意して見れば直ぐに分りました。

私はそんな手紙が來ても、いつも自分一人で讀んだままで、妻には一言もそんなことは云はずに、直ぐに破り棄ててしまひましたから、妻はそんな手紙が來ると云ふことは知らずに、もうすつかり

罪を許されたことと思つて、安心してその日を送つてゐましたが……。そのうち不思議なもので、私はかうして毎日のやうにやつて來る呪詛の手紙を讀んでゐるうちに、私にはだん〳〵その手紙に書いてあることが事實のやうに思はれて來ました。

さあ、さうなると私には、何から何まで妻のすることが、疑ひの眼で見られるのです。里に往くと云つて出懸けて往つても、莚之助に會ひに往つたんぢやないかと思はれるし、机に向つて手紙を書いてゐるのを見ても莚之助のところへ手紙を遣るのぢやないかと疑はれるのです。さう疑ひ初めると私の心の中に猛然として起つて來たものは、胸を燒くかと思はれるほど烈しい嫉妬と憤りです。

幸福だつた私の家庭は、さうなるともう私には、暗い地獄としか思はれませんでした。私の心に燃え上つた嫉妬と憤りは、私の功名心なぞを、もう微塵に打碎いてしまひました。當年の志士を以て任じてゐた私のことですから、以前からずゐぶん酒を飲んで、悲憤慷慨をやつたものですが、かうなるともう私は殆ど家に歸らずに、毎日酒にばかり浸つてゐました。

私が世の中から葬られてしまはなければならないやうになつたのは——佐久間卓也と云ふ本當の名前を持つてゐながら、都築七郎と云ふ僞りの名で生きて往かなければならないやうになつたのは、

やつぱり酒から起つた間違ひで……さうですなあ、さう云つた荒んだ生活が、一二年も續いてからのことでしたらうか。」

六

「それはやつぱりあの惡魔が私に向つて企てた怖ろしい復讐のひとつだつたのです。あの男はさうやつて毎日呪詛の手紙を寄越して、私をもう居ても立つてもゐられないやうな苦しみに陷れて置きながらも、まだそれだけでは飽き足らずに或る女を嗾かして、私にひとりでに罪を犯させるやうに企らんだのです。自分ぢやあそんな役目を勤めてゐると云ふことは知らなかつたのでせうが、惡魔の手先になつて私に近寄つて來た女と云ふのは君丸と云ふ新橋の藝者で、ちよつと小意氣な女でした。」

「君丸」と云ふ名前を聽くと、扇之助は思はずぎくりとしたやうな顏付で、後の言葉を待ち構へてゐるやうに、ぢつと老人の顏を凝視めてゐたが、老人の方でも改めて話し懸けるやうに扇之助の方に向き直つて云つた。

「扇之助さん。君丸と云ふ名前を聽くとびつくりなさるだらうが、これはお前さんの君丸のおつ母

さんさ。實はあのお前さんの君丸は、あたしがあの女に生ませた子なんですよ。」

「えつ……それぢやあ京子さんと君丸とは腹違ひの姉妹だつたんですか。」

扇之助は思はずかう云つて訊き返さずにはゐられなかつた。

「ええ、さうです。如何です。淺猿しいぢやありませんか。いくらお互ひに知らなかつたとは云へ、姉妹で一人の男を爭つてゐたんです。私にはこれもやつぱり、あの男が復讐のためこんな淺猿しい爭ひをさせたものとしか思はれません。が、まあ、このことは後でお話するとして、今の話の續きをお話しませう。」

さう云つて、また老人は語り繼いだ。

「何しろ家庭がこんな工合だつたので、何か慰めを求めてゐたところでしたから、私はその女からちよつと情のありさうなことを云はれたりされたりしてゐると、忽ちもう夢中になつて逆上せ上つてしまひました。天下とか國家とかを論じてゐる時は、兎に角、志士らしい口を利いてゐた私も、もうその女の前に出ると、一箇の遊冶郎に過ぎませんでした。私はその女が出來てからは、もうまるで家に歸らずに、今考へても自分ながらお恥かしいほどその女の色に溺れてゐました。私のかう云ふ姿を見て、その女の蔭に隱れてゐたあの惡魔は、どんなに冷やかな笑を洩らしたでせう。

が、もうまるで女に夢中になつてゐた私は、もとよりそんなことには氣が付きませんから、やつぱり毎日好い氣になつて情痴の奴となつてゐました。そして私は一日一日自分を葬るための墓穴を自分の手で掘るやうな馬鹿な眞似をしてゐたのです。

自分で自分を葬らなければならないやうな出來事が起つたのは、それから間もなくのことなのでした。あんまり詳しく申上げてゐては、今夜一晩懸つても話し切れないと思ひますから、手つ取り早く申上げてしまひますが――私は女のために到頭詐欺のやうな罪を犯してしまつたのです。牢屋は私を葬るための怖ろしい墓穴だつたのです。

牢屋に入つてゐたのは僅か一年半ばかりでしたが、私はもうそれつきり世の中から葬られてしまひました。政治家としては勿論のこと、何しろ罪が詐欺などゝ云ふ破廉恥罪のことですから、もう誰も相手にしなくなつてしまつたのです。牢屋を出てからの私は、全くこの世の中に生きて往くことも出來ないやうな哀れな男になつてゐました。涙香が譯した……何とか云ひましたな……あゝさう、さう、『噫無情』か……あの中に出て來るジャンバルジャンとか云ふ男がゐませう。私が牢屋から出て來た時は、何處へ往つても、まるであの男と同じやうな待遇を受けたのです。妻も私を家に入れようとはしませんでした。親類も私を附き合つては呉れませんでした。さうなると私には赤の

他人の方が、どの位懐しいものに思はれたか知れませんでした。

私が佐久間卓也と云ふこれまでの名前を捨てゝ、都築七郎と云ふ新しい名前で生きて往かうと思ひ立つたのは、いろいろ辛い目を見た揚句に思ひ付いたことなのです。そして私はわざわざ自殺した體に見せ懸けるために遺書などを殘して置いて、或る晩そつと姿を隱してしまつたのです。

七

「復讐の第一の相手であつた私が自殺したと見せかけて姿を隱してしまつてから、第二の相手に選ばれたのは、申すまでもなく私の妻だつたのでした。これはその後二十何年と云ふものを都築七郎と云ふ名で暮らして來た私が、蔭ながら自分の娘に會ひたいと思つて東京に歸つて來てから聞いた話ですが、あの男は私がこの世からゐなくなると、今度は私の妻に向つて、私に向つてやつたと同じやうな復讐を切めたのださうです。

かうお話して往くと、あなた方はきつと如何してその位のことでそんなに執念深く復讐をする氣になつたのだらうとお思ひになるだらうと思ひますが……これはやつぱりあたしはあの男には、あたしの父に殺されたあの男の父の死靈があの男に乘り憑つてゐたのだと思ひますよ。さうでもなければあたしには、如何してもあの男の心持が分りませんもの……。これは如何してもさつき申上げたやうに、「復讐」なのです。今時「復讐」と云ふのも變なものなのですが、しかしこれは「復讐」と云ふより外に、何とも申しやうがないかと思ひます。つまりあの男が京子に殺されたのは、返り討に會つたやうものなのですよ。はゝゝゝゝ……。」

さう云つて快さゝうに笑つたが、その笑ひ聲は妙に上吊つてゐて不氣味だつた。

「で、これから先きはもう大分御承知のこともあるのだから、手短にやつてしまひませう。私はこの世から姿を隱してから後のことですから、京子が如何してあの櫻井と云ふ家に嫁付くやうになつたかよく存じませんが、これもいづれはあの京子の母が、金に目が眩んでからのことゝ思ひます。何しろもうその時分にはあの女の實家もすつかり政治運動のために貧乏をしてしまつて、ずゐぶん困つてゐたんだつて云ひますから……。しかし、これとてもみんなあたしが惡かつたのです。今ぢやあもう罪は私一人にあるやうな氣がしてならないのです。

ああ、それからひとつ是非お話して置かなければならないのは、あたしが其の後九州で偶然あの莚車の命を助けたことがあるのです。天と云ひませうか……運命と云ひませうか……ずゐぶん皮肉な惡戯をするぢやあありませんか。たとへ偶然とは云へ、自分を呪つてゐたものゝ命を助けさせる

なんて……。しかし、私はこのことだけは、今思ひ出しても何となく好い心持がしてなりません。たとへ敵でもあれ、その時のことを思ひ出すと、やつぱり何となく懐しい氣がしてならないのです。

それは私が姿を隠してからもう可なり經つてからのことでした。ずつと支那に往つてゐて、何と云ふ商賣もない、云はゞ支那浪人のやうなことをしてゐた私は、少し金を造る必要があつて、同じ浪人仲間のものが經營してゐる九州の或る鑛山に來てゐた時のことでした。その鑛山街の汚い小屋に懸つてゐた役者と、坑夫頭との間に、女の取り遣りが初まつて、何しろ氣の荒い輩のことですから、危くその役者は殺されさうになりました。で、私は餘計なお世話だとは思つたのですが、何しろ人の命に關はることだと思つて、その喧嘩の中に飛び込んで往つて、助けて見ると、その役者があの莚之助——その時分はもう改名して莚車と云つてゐた、あの男ぢやありませんか。

何しろかなり長い間支那三界を歩き廻つてゐたし、その間に私は顔に怪我なぞをして、すつかり相好も變つてゐましたから、昔一二度位しか會つたことのないあの男にはこれが佐久間卓也だと云ふことは分らなかつたのです。それであの男もすつかり私を都築七郎と云ふものだと信じて、その時は私にどの位禮を云つて喜んだか知れませんでした。私もあの男だと云ふことが分つた時には、このまゝ坑夫達の手に渡してしまはうかと云ふ氣も起つたのですが、不思議に私はあの男が可哀さう

になつて、そんなことをすることも出來なかつたのです。かうして私はあの男に取つては、敵と恩人との二つを兼ねなければならないやうなことになつてしまひました。

しかし今考へて見ればこの時あたしが本名をさへ名告つて置けばあの男も京子にまで復讐をするやうなことがなくつて濟んだのでせう……が、何しろ死靈の乘り憑つてゐるとしか思はれないあの男のことですから、果して命を助けられたのを恩に着るか如何か分りませんけれど……。」

八

「まあ、それから先きのことはお話するまでもなく、あなた方の方がよく御存知のことゝ思ひます。京子の生涯をあんな滅茶々々にしてしまつたのも、みんなあの男の復讐の結果だつたのです。扇之助さんの前でこんなことを云ふのも變だが……姉妹で一人の男を爭はせたのも、相場で損をさせたのも、みんなあの男が京子に對してした復讐のひとつだつたのです。

私は一度は京子と名告り合はうと思つたのですが、一度この世から死んでしまつたものが、如何してのめ〳〵父だと云つてこの世に出て往けませう。私は都築七郎としてはかうやつて生きてゐますけれど、佐久間卓也としてはもう疾うにこの世を去つてしまつたもので、今かうやつてお話して

ゐるのも、みんな死骸がものを云つてゐるのです。生きた死骸とは私のことです。」

さう云つて老人はほつと歎息を吐いた。扇之助はこの老人の今の言葉を聽くと、何時だか小出から梗概を聽かされた、トルストイの「生きた屍」と云ふ脚本の主人公がひよつこりこゝに現はれたやうな氣がして、目を睜らずにはゐられなかつた。

が、老人は扇之助がこんなことを考へてゐるとも知らずに話し續けた。

「しかしあたしはあの晩——京子があの男を殺した晩のことを考へると、生きた死骸でもさすがに體中が顫へるやうな氣がしてなりませんよ。あの晩あたしは一人であの淺草の丸重でちびちび飲つてゐたんですが、そこへやつて來たのがあの男で、それから間もなく京子がやつて來たつて譯なんですが……。ああ、さう、さう、あの時は瓢八さんも、小出さんもあすこで飲んでゐた仲間だからよく御存知の筈だ……。が、あたしがあれから京子の後を尾けて往つたつてことはあなた方は……あの場に居合せた瓢八さんの外は、まだ御存知なかつたでせう。あたしはあんなことにならうと思つて尾いて往つたんぢやあなかつたんですが、唯私はあの時あの男があの丸重の店で京子に向つて、復讐だ復讐だと云つた言葉を聽くと、不思議に私の心は燃え立つたのです。

（おれはもう生きた死骸ではなくなつたぞ。おれはもうもとの佐久間卓也に返らなければならないのだぞ。）

さう云ふ言葉が何か怖ろしいことでも勸めるやうに、私の胸の中から聞えて來たのです。

私はその聲を聽くと同時に、生きた死骸でなくなれば、都築七郎と云ふ名前を棄てて、もとの佐久間卓也となれば、私は如何しても自分の娘の京子に會つて父子の名告りをしなければならないと思つたものですから、急にその氣になつて私は京子の後を追つてあの店から飛び出したのです。しかし私は雨の中で京子の後を尾けて往きながらも、まだ如何云ふ風にして名告り合つたものかはつきりした考へが附かないうちに、到頭あんな騷ぎになつてしまつて、私が娘の體を抱いた時には、もう京子はまるで何も分らないやうな正體のない女となつてゐました。

が、正直に申上げますが、私は京子があの男を殺したのを見た時、思はず心の中で、（ああ、これですべてが終つたのだ。）

と叫ばずにはゐられませんでした。復讐、また復讐——とでも申しませうか。何時まで續くか分らないやうな復讐も、あの男が殺され京子が狂人になつてしまへば、兎に角それでおしまひだらうと思つて、私はあの男の死骸を眺めながらほつと一息吐いたのです。がそれは私の淺墓な考へでした。あの男はこの世からゐなくなつても、まだ地獄から私に向つて復讐をしてゐるのです。いえ、

私にばかりではありません。あの男を殺した京子に向つても、私に向つてよりはもつと激しい復讐をしてゐるのです。京子の病室の扉だつてあの男が外してやつたのに違ひありません。そしてあの男が京子をわざわざ汽車の線路の傍にまで誘つて往つたのに違ひありません。

私の耳には今でも地獄から私を呼んでゐるあの男の聲が聞えるのです。ああ、聞えます、聞えます……あんなに絶えず叫んでゐます。」

九

老人の叫び聲が、あまり異様だつたので、みんなそこにゐたものは、此老人までが氣が狂つたのではないかと思つた。が、老人はみんなが不思議さうに彼の顔を凝視めてゐるのに氣が付くと、急にわれに返つたやうに話の調子も穏かになつた。

「いや、もうこんなこと申上げたつて、みんなほんとにはなさるまいし、くだらない長話でもう倦き倦きなすつたらうから、この位のところで止めて置きませう、すゐぶん話が前後したり何かしてお聽き難くかつたでせうが、兎に角今お話し申上げただけでも、大抵私夫婦や私親子がどんなものだかお分りになつたらうと思ひます。そしてまたそれと同時に、私達一家のものが如何云ふ譯であ

の莚車と云ふ男から、復讐されなければならなかつたかと云ふことも大抵お分りになつたことゝ思ひます。がしかし、私が考へるところでは、この話はかう長々とお話しなくつても、もう唯の一言で分ることだと想ひますよ。それは何です……。つまり死靈のため……とこれだけのことです。」

老人はかう云つてその話を終つたが、その話をしてゐるうちに、だんだん濃くなつて往つた恐怖の色はまだ中々その顔からは消えなかつた。

雷鳴はもう聞えて來なかつたけれども、雨はまだかなり烈しく降り續けてゐた。この瀑のやうな雨の音を聽いてゐると、老人でなくとも、誰でもあの怖ろしい「莚車殺し」のあつた晩のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。殊にその晩「丸重」に居合せた小出や緋紗枝や瓢八には、今老人の死靈の話を聽いたばかりなだけに、この雨もやつぱりその死靈が降らせてゐるのではないかとも思はれるのだつた。みんな脅えたやうになつてゐるので、老人が話を終つてからも、誰も口を利くものもなかつた。

扇之助にはさすがに老人の云ふ死靈の話は信じられなかつたけれども、この話で始めて復讐の意味がはつきりと分つたやうな氣がした。と同時に、彼自身思はないことから罪障を作つてゐると云ふことを感じない譯には往かなかつた。京子が君丸の腹違ひの姉であると云ふことを聽いただけで

も、彼は人間の世を淺猿しいと思はずにはゐられなかつた。彼は老人の物語を聽いてから、いよいよ世を厭ふ念が深くなつてゆくやうに感じられた。

（役者なんか止めてしまつて、何處か旅にでも出てしまはう。）

彼は心の中でこんなことを考へながら、默つてぢつと思ひ沈んでゐたが、いくら考へてもこれから先き、さうするより外に彼の往くべき路はないやうな氣がして、われとわが身が果敢なまれた。

鄕田は老人の話の半頃から、多少その話を信ずるものゝやうに耳を傾けてゐたが、そのうち彼の目には思ひ懸けないやうな涙が光つた。それを見ると扇之助は、それに誘はれたやうに涙ぐまれた。

一座が滅入つたやうになつてゐるのを見ると、瓢八はわざと景氣を附けるやうに、

「さあ、みんなかう滅入つてゐたんぢやあいよいよ幽靈が出さうですぜ。さあ、一杯ぐつと勢ひを附けて、ちつと陽氣にやらうぢやありませんか。」

と例の頓狂な聲で叫んで、自分で酒の燗を附けに往つたり何かして飲み初めたが、もうかうなつては如何しても、みんな滅入つてゆくばかりだつた。

が、そんなことをしてゐるうちに、雨はだんだん小降りになつて、雨戸の隙間からは青白い曉の光が射し込んで來た。

大河の方から船の汽笛が寂しく聞えて來る時分になると、曉闇はだんだん白み始めた……。

流離の旅

一

京子の葬式を濟ますと扇之助は何だか自分の生涯にも一段落附いたやうな氣がして、ほつと思はず吐息が吐かれた。無形劇場で「出發前半時間」の從者や「奇蹟」の聖者アントニウスを演つた時から僅か一年にもならない時が過ぎただけだつたけれども、彼にはそれが十年も二十年もの長い時が經つたやうに感じられてならなかつた。あの一年ばかり前から毎日のやうに、彼のところへ寄越した京子からの謎のやうな手紙は、殆どみんな破り棄てゝしまつたのだが、如何してだかあの晩讀んだ「オペラ役者さまへ」とした手紙だけは、彼の手箱の中に殘されてゐた。そしてそれが何かの因緣でもあるかのやうに、京子の葬式を濟ました翌くる日の朝、何氣なくその手箱を開けた彼の手に見出された。

（到頭この女も死んでしまつたのだ。）

さう思ひながらも、何となく無常が感じられて、何時になにしみじみとした心持でその手紙を讀んで行つたが、（役者なんてほんとに罪な御商賣ね）と書いてあるところに來ると、彼は思はずぎくりとして、何だか墓の下から彼女がさう云つて彼を嘲つてゐるやうな氣がした。彼は今度こそ役者を廢めて舞臺から退いてしまはうと思つた。

有樂座であの無形劇場の試演があつた時から、ともすれば彼の心を暗くした不安は、折角思ひ立つた旗揚興行に失敗して以來と云ふものは、消ゆべからざる鬱憂の影をその胸に投げて、彼は絶えずそのために惱まされてゐた。自信を失つた藝術家――殊に舞臺に立つて萬人の前にその技藝を示さなければならない役者ほど、世にみじめなものはないと云ふことを、彼は始めて身にしみじみと思ひ知つた。空虛なる拍手、空虛なる喝采――そんなものを聽いて喜んでゐるうちは、まだ舞臺に立つ張り合ひもあつたが、それが何だか嘲笑してゐるやうに聞えて來ると、もう舞臺に立つても、臺詞ひとつ自信を以て言ふことが出來なかつた。もうさうなると舞臺の上に立つてゐるのは、藝術家としての役者ではなくして、興行師の爲に操られてゐる一個の傀儡に過ぎない……。

（みんなはそんな傀儡となつても滿足してゐられるかも知れないが、自分は如何してもそれでは滿足することが出來ない。）

これはこれまでにも幾度か心の中で繰返された言葉ではあるが、この言葉は彼の心に不安の影が濃くなつてゆくとともに、だんだん力强く胸に響くやうになつて來たのだつた。

で、彼が役者を廢めると云ふことは、言ひ換へれば傀儡としてでなく、人間として生きて往きたいと云ふことに外ならなかつたが、さて人間として生きて往くのには、如何したら好いかと云ふことになると、彼とても如何と云ふ考へがあるのではなかつた。何時だか小出に向つて（坊主になる）と云つたこともあつたが、それは彼にはあまりに芝居氣があり過ぎるやうに思はれて、事實として現はすことは出來なかつた。自分のこれから先きのことは勿論、彼には世の中のすべてのことが思ひ煩ひの種であつた。世を厭ふ心は日毎に深くなつて往つた……。

殊に彼の厭世の念を深くしたのは、狂瀾のやうに彼の身を襲つた情痴の潮が、退いて往つてから後に殘した寂しさだつた。彼は思ひ出すまいと思ひながらも、夜になるときつと、君丸のことを思ひ、京子のことを考へずにはゐられなかつた。

と、京子の葬式を濟ました翌日の朝、扇之助が不圖手箱の中から京子の手紙を見付け出して、それから引き續いていろ〳〵のことを考へてゐると、丁度そこへ鄕田が飄然と訪れて來た。

「あの、鄕田さんと云ふ方がお見えになりました。」

さう云ふ女中の言葉を聽いた時彼の胸には不圖（ああ、丁度好いから郷田さんに相談をして見ようか知ら……）と云ふ考へが浮んだ。

二

「やあ……。」

ずしりずしり跫音を立てながら階子段を上つて來た郷田は、扇之助の顏を見るなりさう叫ぶやうに聲を懸けてから、

「如何だい、君も疲れたらう。」

と云つて突然そこに趺座をかいた。彼は自分の事業がうまく往かないところに、今度圖らずも京子の死に出會つたりなどして、かなり元氣はなくなつてゐたが、それでもまだいつもの豪快味を失つてゐるほどではなかつた。殊にその日は何處で飲んで來たのか、多少の微醺をさへその頰の上に漂はしてゐた。

扇之助は郷田の顏を見ると、今まで思ひ惱んでゐたことが馬鹿らしいやうな氣がして、厭世の影などもひとりでに胸から消えてゆくやうに思はれたが、それでもまだ彼は微笑を以て迎へることが

出來るほどの餘裕はその心に生じては來ないのだつた。で、彼は多少の鬱變をその面に現しながら云つた。

「全く疲れましたよ。しかしこれですべてが終つたのだと思ふと、いくらか落着いたやうな心持にもなつて來ました。」

さうすると郷田も同感だと云つたやうに大きく點頭いて、

「全くこれですべてが終りだ。あの老人の話してゐたことを、僕は全部信ずることは出來ないが、幾分だけでもほんとにしても、もうあの怖ろしい復讐もすべて終つてゐるのぢやないか。」

と云つてゐたが、急に氣が付いたやうに調子を變へて云つた。

「それで……今日僕がここに君を訪ねて來たのは、改めて君にお話したいことがあつてやつて來たのだが……。」

「何です、その相談つておつしやるのは……。實は私もあなたがお見えになつたのを幸ひ、御相談したいと思つてゐることがあるのですよ。」

「ははははは、相談と相談の鉢合せか。そいつは丁度好い。まあ、君から話したまへ。」

郷田に莞爾とした笑顏を以て、かう云つて親しげに促されると、扇之助はもう遠慮しずに話し出

さずにはゐられなかつた。

「ええ。それなら私から申上げませう。その御相談と云ふのは外でもありません。私はもうつくづく役者なんて商賣が厭になつてしまつたのです。まだ多少の自信があつて、舞臺に立つてゐるうちはそれほでどもなかつたのですが、この春頃から急に自分の藝に自信がなくなつてしまつて、妙に不安を感じ出してからと云ふものは、もうとても舞臺に立つてゐられなくなつたのです。それも自分の思ふ通りのことが演つてゐられゝば好いのですが、何しろ私達は興行師の云ふがまゝに、くだらない芝居でも何でも演らなければならないのですから、全く舞臺に立つてゐても自分ながら傀儡のやうな氣がしてならないのです。」

さう云つてから彼はちよつと躊躇つてゐたが、直ぐにまた言葉を續けた。

「それにもうひとつ私の役者が厭になつた譯は……さうです、その譯は私が口で申上げるよりも、この手紙をお讀み下すつた方がよくお分りになるかも知れません。」

さう云つて彼は例の「オペラ役者さまへ」と書いてある京子の手紙を、手箱の中から出して鄕田に渡した。

鄕田はその筆蹟を見るなり京子の手紙だと云ふことが分ると、その男性的な顏に始めて傷ましい

やうな表情を示した。

三

鄕田は「有樂座樂屋にて、中村扇之助樣」と書いた水色の封筒の表面を、ぢつと凝視めたまゝ、何時迄も中を讀んで見ようともしなかつたが、そのうち心持顚へてゐるかと思はれる手先で、同じ色の書簡箋を引き出して、徐かに始めから讀み初めた。そして彼がその手紙を讀み終るまで、かなり重苦しい沈默が續いた。

が、手紙の終りに近くなると、だん〳〵鄕田の顏に現はれた傷ましい表情が消えて往つたので、さつきからぢつと鄕田の顏ばかり凝視めてゐた扇之助の心にも、いくらか餘裕が出來て來ると同時に、何かものを云はずにはゐられなくなつた。

「ねえ、鄕田さん。その手紙をお讀みになつて、あなたは如何お考へになるか知りませんが、私は何だかそんな手紙を受取ると、白刃を突き付けて、脅迫されてゐるやうに思はれてならなかつたのですよ。で、もし役者をしてゐなかつたら、こんな手紙を受取らなくつても濟んだらうと思ふと、もうあたしには堪らなく役者が厭になつてしまつたのです。」

彼がその手紙を見た時の心持を説明するやうにさう云ふと、郷田はまたさつきと同じやうに大きく點頭いて、

「うん、何しろ大變な手紙だね。だが、君……。君達の仲間にはこんな手紙が來るのを待つてゐる人もあるんだらう。」

「そりやあるでせうが……私は如何もこんな手紙を見ると、先づ最初に侮辱されたやうに感じられて、腹が立つて來るのです。兎に角私は性格的にも役者ではなかつたのだと云ふことを、近頃しみじみ感じて來ました。親が役者だつたから、子供まで役者にならなければならないつて理窟はありませんし、やつぱり人間はその人自身に生きて往くべき道を見付けるのが本當ぢやあないんでせうか。あたしはそんなことを考へて來たら、何だかもう一日も舞臺に立つてゐることが出來ないやうな氣がして來たんです。で、あなたに御相談したいと思ふことは、これから役者を廢めて、どんな風にして生きて往けば好いか、と云ふことなんですが、何しろ子供の時から舞臺と樂屋でばかり育つて來てゐる私のやうなものは、せめて誰かから暗示位與へて頂かなければ、ちよつと自分の生きて往くべき道に惑はれるのです。如何でせう。郷田さん。私はこれから如何したら好いでせう。丁度私の生涯に一段落付いたやうに思はれてゐるところですから、今が丁度舞臺を退くのには好い

機會なんですけれど……。」

さう云はれると郷田は、至極我が意を得たものゝやうに莞爾として笑つて、

「うん、君はそこに氣が付いたのは非常に好い。それで君は救はれたと云ふものだ。よろしい。僕には暗示を與へるなんてそんな生溫いことは出來ないから、明らかに君の生きて往くべき道を教へてやらう。それは外でもない。これから僕と一緒に事業をしたまへ。」

その言葉はかなり扇之助には意外だつたので、思はず少し調子を高めて、

「事業……事業つて云ひますと……。」

と言つて訊き返した。が、郷田はかへつて訊き返されたのが意外らしく、

「事業は事業さ。あんな小さな舞臺の上なんぞに蹈躇してゐずに、蒙古なり南洋なり印度なり亞弗利加なり、もつと廣い舞臺の上で大芝居をやるのさ。最初君に會つた時から、さう思つてゐたんだが、君は元來役者なんて柄ぢやあないよ。君はほんとはもつと強い男なんだらうが、役者なんぞをしてゐるから、そんな氣の弱い男になつてしまつたんだ。だからこゝで舞臺を退くのを機會に、改めて新しい生活を始めたら好いぢやあないか。實は今日君に相談あつて來たと云ふのは、君をひとつ僕の船へ拉し去らうかと思つたからなのだよ。如何だい、ひとつ一緒に出懸けないか。」

「それぢやあもう直何處かへお出懸けなんですか。」

「うん、今夜にも出懸けられるやうになつてゐるんだ。解は二百噸ばかりの帆船だが、小さくとも自分の家だと思ふと、陸にゐるよりは安心だよ。」

「で、お出懸けになると云ふ先は……。」

「往く先なんぞは分るものか。」

四

「事業」と云ふ言葉を聽くと、扇之助は或ひは自分の生きて往く道は、そこにあるのではないかと思はれるやうな氣がしたが、しかしよく考へて見ると、やつぱりそれは自分の生きて往くべき眞實の路ではないと云ふことが分つた。さうなると彼は如何したら好いか、再び思ひ惑はずにはゐられなかつた。郷田も結局は一箇の空想家で、彼の空想の世界に扇之助を置かうとしてゐるのだと云ふことはその夢見るやうな眼差が語つてゐた。その目には暖かい南洋の海の色が、欄茂る島影を映して、照る日の下に輝いてゐた。

短い沈默があつた後で、郷田はまた更に言葉を續けて、彼の空想を語り次いだ。

「まあ、君ちよつと考へて見たまへ。好いぜ、海の上の生活はほんとに何とも云へないからなあ。僕は陸に上つて三日もすると、何だか身體中土臭くなつたやうな氣がして早く海に往きたいと思ふよ。陸にゐりやあこそいろいろ煩はしい係累のために惱まされるんだが、海の上には何もそんなことがないんだから、それだけでもどの位愉快だか知れやしない。甲板の上に卓子を置いて、それを取り圍んで泄を飲む時などは、實に堪らんからねえ。何うだい、君。僕と一緒に出懸けようぢやないか。そしてもうこれまでのことなんかみんな忘れてしまふのさ。」

さう云つて熱心に勸める郷田の心持は、扇之助にさう云つた新しい海の上の生活をさせたいと云ふよりは彼がかなり深く受けてゐる心の痛手を忘れさせたいためだと云ふことは、彼にもよく分つてゐたが、しかしそんなことで果してすべての過去を忘れることが出來るか如何か、彼自身にも分らなかつた。むしろ忘れられないのが眞實であるらしく思つた。

「そりやあ海の上の生活は面白いだらうとは思ひますが、如何も私にはまるで經驗のない生活ですから、何だか思ひ切つてあなたのお勸めに從ふと云ふ譯にも往かないやうな氣がしますよ。」

さう云はれると郷田は、急に自分の空想の糸を絶ち切られたやうな寂しさを、まざまざとその面の上に浮べて、

「ふうん、それぢやあ君はこれから如何しようつて云ふんだね。」

「さうですねえ。やつぱり自分のことは自分で考へた通りやつて往く方が好いと思ひますから、私はこれからは自分で考へた通りやつて往かうと思つてゐます。」

「だからさ。君は自分で如何考へてゐるかつて訊いてゐるんだよ。」

彼は郷田が苛々した調子でさう云ふのを聽くと、折角相談をしかけて置いて、こんなことを云ふのは惡いやうな氣がして、多少辯解をするやうに、

「さつきはあなたに御相談した上で如何にか極めた方が好いと思つてゐましたが、しかし自分のことを他人に相談しても仕方がないと云ふことに、今やつと氣が付きました。だから折角御相談をしかけて置いて、こんなことを申上げるのは何とも申譯がありませんが、私はやつぱり自分で自分の往くべき道を考へませう。」

「何だ。それぢやあまだ君は別に何か考へがあるつて譯ぢやあないのだね。」

「多少ありますが……まだはつきりかうと考へが極つてゐる譯ぢやありません。」

「さうか……。君がさう云ふ考へなら仕方がない。僕は豫定通り今夜一人で出帆することにしよう。が、別れに臨んでちよつと君にだけ云つて置くが……僕はもう一生日本には歸つて來ないつもりだ

よ。」郷田の頰の肉はぴりりと動いた。

五

「兎に角僕はもう日本になんてゐるのがつくづく厭になつたんだ。いや、日本にゐることばかりぢやあない。人間と云ふものがつくづく厭になつてしまつたんだよ。僕には今人間よりも自然の方がどの位懷しいか知れやしない。僕はもうこれからは一生自然を友として暮さうと思ふんだ。海も、空も、太陽も、雲も、みんなこれからは僕の友達なんだ。そこには戀だとか何とか云ふ、くだらない煩ひがないだけでも、僕には樂しく暮らせるんだ。」

郷田はさう云つてから急に立ち上がつて、

「さあ、君が往かないとなれば、これから直に船に歸つて、出帆をする支度をさせよう。それぢやあ、君。これがもう一生のお別れかも知れない。君もまあ無事で暮らしたまへ。」

と云つたなり扇之助がまだ何とも云はないうちに、またさつきと同じやうにずしりずしり跫音を立てゝ階子段を降りて往つた。扇之助は後を追ふやうにして玄關まで往つて、そこで別れの言葉を懸けようとしたが、何だか胸が一杯になつて、ものを云ふよりも先きに涙が零れた。

扇之助は自分の書齋に歸つて來てからも、何だかひとりでに涙が目から溢れ出して來て、しきりに厭世的なことばかりが考へられてならなかつたが、郷田の話を聽いたり何かしてゐるうちに、彼の心もだんだん定まつて來た。いよいよ舞臺を退いた上は、これから自分の生きて往くべき道を考へるために、兎に角旅に出ようと思つた。

彼の目には船の甲板に立つて月を仰いでる郷田の姿が、何よりも懐しく浮んで來た。彼の勸めを斷つたことが、彼の胸に微に悔恨を齎して來たが、それも直ぐに消えてしまつた。

（やつぱり自分は一人で自分の往くべき道を歩いて往かう。）

さう思ふと彼には、心の底から湧いて來る寂しい力强さが感じられた。これからはこれまでのやうに一箇の傀儡としてゞなく、ほんとに一人の人間として生きて往けるのだと思ふと、踴躍したいやうな喜びで、彼の胸は一杯になつた。

が、さて旅に出るとすると何處へ往くと云ふ目的もなかつた。長崎へと云ふやうなことも考へられたが何だかこの夏の不愉快な記憶があるので、それは直ぐに腕の中で否定してしまつた。日頃から俳句などに趣味を持つてゐる彼は芭蕉の「奥の細道」がひどく好きでいつも愛讀してゐたから、旅と云ふとこの古の俳聖の行脚の跡を

辿りたいと思つたが、これも何だかあまりに寂しいやうな氣がして、さして心も惹かれなかつた。で、彼はいろ〳〵思ひ惑つた果に、不圖思ひ付いたのは、佐渡に彼の一人の俳句の友達がゐると云ふことだつた。それは烏賊と云ふ俳號の男で、若い時からこの島に住んで醫者をしてゐた。

（さうだ、佐渡へ往かう。佐渡は今の自分の心持とぴつたり合つてゐるやうな氣がする。）

彼はさう思ふと、直にその友達へ宛てゝ手紙を書いて、一人で寂しく旅支度を初めた。が、いろいろ机の周圍を片附けたり何かしてゐるうちに、不圖まださつき郷田に見せた京子の手紙が、そのままそこに拋り出されてあるのを見ると、彼はまた未練らしくそれを取り上げて、もう一度繰返してそれを讀んでゐたが、そのうち最後の「オペラ役者さま」と書いた文字のところに來ると、急に腹立たしさうにずた〳〵にそれを引き裂いてしまつた。

六

扇之助はいよ〳〵旅に出ると心を極めると、もう一日も家にはゐられないやうな氣がして、慌しく旅裝を調へるなり、その翌日の朝唯一人上野を發つて往つた。

汽車に乘つて見ると、今更のやうに過去のいろ〳〵の事がかへりみられて、車窓から見える暮秋

の景色も唯寂しく目に映つてゆくばかりだつた。彼は窓の硝子戸越に見える、田圃や、林や、小川や、橋や、そんなものをぼんやり見遣りながらも、心は遠く彼自身の過去の姿や、彼を取り卷いてゐた幾人もの女性のことを考へてゐた。狂瀾のやうな情痴の潮が退いた跡に、彼とともに殘された寂しさが、またしみじみと思ひ出された。

汽車はわさと急行でない緩い列車を選んだので、一々小さな停車場にも停まつて往つたから、妙義の山が見え出して來るまでには、かなり長い時間が懸つた。彼はその間ずつと車窓に凭れて、そんな過去の回想に耽つたり何かしてゐたが、そのうちそれにも倦きて來ると、鞄の中から「芭蕉全集」を取り出して、それを開いて讀み初めた。旅人としての今の彼に取つては、これよりも外に、讀むべき書物はないやうな氣がして、今度の旅行にも、この本一冊だけしか鞄の中に抛り込んで來ないのであつた。

彼が何氣なく讀み初めたところは「野ざらし紀行」と云ふ、芭蕉の寂しい旅日記で、讀んでゆくと先づ「野ざらしを心に風の染む身かな」と云ふ句が鋭く彼の心を射るやうに目に留つた。彼はずつとその句の上に目を注いだまま、長い間瞬きもしずに考へてゐた。

彼はさうしてぢつと考へてゐるうちに、何だか彼の心には、これまで知らなかつたものが感じられて來るやうな心持がした。それはこれまでよく感じたやうな寂しさでも悲しさでもなく、もつと深い、もつと澄んだ、ちよつと言葉では云ひ現せないやうな心持だつた。彼はぢつと默つてこの心持の中に浸つてゐると、ひとりでに身も心もすがすがしくなつて往くやうに感じられた。

「野ざらしを心に風の染む身かな。」

彼はかう微に口に出して呟くやうに口吟んでから、不圖顔を上げて車窓の外に目を移した。妙義は何時の間にか遙かあなたに隔つてしまつて、汽車はもう碓氷峠に懸つてゐたが、景色を眺めようと思つて何氣なく窓の硝子戸を開くと嵐氣は冷たく彼の頰を打つて、秋風は遠に寒く身に染むのを覺えた。

汽車がだん〳〵峠を昇つて往くにつれて、彼自身もだん〳〵高いところに登つて往くやうに思はれて、何時しか情痴の世界のことなどは過去の夢として忘れられてしまつた。彼の今感じてゐる寂しさは、これまでに知らなかつたやうな淡々とした境地に彼の心を誘つて往つて、窓から眺められる雲の去來にも、心がだんだん和んで往つた。

（旅だ……。旅だ……。これからはもう一生流離の旅を續けてゐよう。）

彼はもう心の中で叫びながら、昔から云ひ古されたことではあるが、人生は短い旅に過ぎないと

云ふことを、考へずにはゐられなかつた

（京子も君丸もみんな旅で會つた遍路の一人に過ぎないのだ。）

彼はさう思ふと急に嵐氣の冷たさが感じられて、ぱたりと音を立てて窓を閉めると、投げるやうにそこに腰を下すなり目を閉つた……。

暫時經つてから氣が付いて見ると、汽車はもう何時の間にか峠を越して、岑掛の高原を佐久平の方へ、驀然と凄じい勢ひで駛り下つてゐるところだつた。

—了—

295.

大正十一年四月二十日印刷
大正十一年四月廿五日發行

（定價貳圓貳拾錢）

著作者　吉井勇
發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮

◀狂へる戀◀

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話番町　八〇七番　八〇八番　八〇九番
振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　電話小石川五九二一番　富士印刷株式會社
印刷者　佐々木俊一

■源氏物語情話

吉井勇氏著　定價壹圓廿錢、送料拾錢

戀愛文學として古今に冠絶する源語を現代文に縮寫せる、情趣饒かなる物語也。

■自選歌集四編　吉井勇集

吉井氏の全歌集につき其の精粹を拔くこと一千餘首。歌人としての全面目を見る可きものたり。定價壹圓廿錢、送料拾錢

吉井勇氏著

■歌集　旅情

佐渡、越後、長崎、京都、奈良、紀州、その他飄零のおもひを行く雲に托して、作者が足跡の及ぶ所、そこに新しき歌枕を作れり。

（浩一路　定價八拾錢　送料六錢）

■祇園歌集

若く涙多き詩人が京都及び大阪等に詠みしもの總べて三百首。燃ゆるが如き情熱を注いで戀の都を讃す、眞に作者の獨擅境也。

（夢二裝）　價六拾錢　送料六錢

■東京紅燈集

紅燈華かなる東都の花柳街を歌ひ、名ある歌妓を歌ふ。新作三百首。歌はれたる東京情話にしてまた、歌はれたる東京美人譜也。

（夢二裝）　價六拾五錢　送料六錢

■現代脚本叢書■

劇の機運大に動くの時を以て本叢書を發刊せしが、果して異常なる歡迎を受けつゝあり。收むるところ何れも諸家の最も自信ある名篇のみ也。

第一編　未能力者の仲間　武者小路實篤氏著
（附）AとB。或日の出來事。桃色の女。母の心配。

第二編　飢渴　長田秀雄氏著
（附）轢死。大雪の夜。

第三編　法成寺物語　谷崎潤一郎氏著
（附）十五夜物語。春の海邊。

第四編　髑髏舞　吉井勇氏著
（附）葡萄棚。犬。小しんと焉馬。

第五編　阪崎出羽守　山本有三氏著
（附）淀見藏。穴。嬰兒殺し。

第六編　雨空　久保田万太郎氏著
（附）四月雪。宵の空。雪。暮れがた。火とり蟲。

第七編　秦の始皇　灰野庄平氏著
（附）芭蕉と遊女。義隆の最後。少年の道德。墓の前。其他。

各冊約二百四十頁＊價一冊壹圓＊送料一冊六錢

304 26 5 朱一 水 105

吉屋信子女史著

海の極みまで

特製箱入 最上製美本◆價貳圓五拾錢 郵送料拾貳錢

女郎蜘蛛の金糸で縫つた見事な出の晴着に、潔く呪ひに死 うも云ふ近代的女性の滿智子、戀も望みも拋つて、憤ましく哀しい運命に生くる靖子、この二人の美くしい少女を中心として、淫蕩な貴夫人、放縱な大學生、さまざまの人物を配して波瀾重疊の筋を運び、興味豐かなる中に、深刻なる宗教味の強く強く人の胸をうつものがある。

菊池寛氏著（全二冊）

眞珠夫人

羽二重表紙 特製最美本◆定價各冊貳圓 送料各冊八錢

最近の新聞小説で斯くの如く絶大の好評を博したものは無い。麗容花の如き美人が父の敵の許に嫁して飽く迄も其純潔を守り、其良人たるして悶々の情に堪ゆる能はざらしめ、後、世を呪ひ人を弄ぶ一妖婦と更生して、幾多の青年を弄殺するの終始を描けるもの。此の種小説中、未だ何人も筆を着けなかつた近代女性の面目躍如たるものがある。

小栗風葉氏著（全二冊）

思ひ妻

羽二重表紙 特製最美本◆定價各冊貳圓 送料各冊八錢

一人は、豐艶の肉に驕傲の心を包むクレオパトラ型の妖婦で、人妻の身を忘れたる戀に狂ひ、一人は傷つけられた矜持に惱み、一人は救ひなき犧牲として果敢なき思ひを夢に祕む。三人三樣の女性の戀を描ける一大戀愛小説であると共に、新時代と舊時代との對峙、勞働者と資本家との爭鬪を取扱へる問題小説で、規模極めて雄大な力作である。

506
89

終